

ぬかた便り

岡崎市立額田図書館
春号 No. 42
2017年3月発行

冬の寒さも和らぎつつあるこの季節。今回は「**愛知県が舞台の作品**」です。小説やノンフィクション、旅行記などを何冊かご紹介致します。春の陽気に誘われて、実際に舞台になった場所を訪ねてみてはいかがでしょうか。見慣れた景色の中に新しい発見があるかもしれません。

愛知県が舞台の旅行記



『街道をゆく 43』
司馬遼太郎／著 朝日新聞社
(915.6 シハ)

司馬遼太郎さんの有名な『街道をゆく』シリーズ。この作品を執筆途中に司馬遼太郎さんは逝去され、未完の最終巻となってしまいました。この作品では愛知県の尾張、三河の有名人物、歴史や文化などに広く触れています。最後に書いてある「名古屋ってほんとにツイてない所だね」という編集者の言葉にくすりと笑ってしまいます。



『古城の風景 1』
宮城谷昌光／著 新潮社
(915.6 ミヤ)

蒲郡市出身の宮城谷昌光さんが愛知県の東三河の古いお城を巡った『古城の風景』第1巻です。このシリーズは7巻まであり、古城の現在の風景や歴史などを紹介しています。宮城谷昌光さんが古城を巡った時の様子も書かれていて、ゆったりと旅を楽しんでいる姿が目につかびます。歴史好きの方におすすめです。



愛知県が舞台の歴史小説



『清須会議』
三谷幸喜／著 幻冬舎
(913.6 ミタ)

三谷幸喜さんの『清須会議』は映画にもなった作品です。愛知から出た戦国時代の三英傑の一人、織田信長。清須会議では本能寺の変で信長が亡くなった後、誰を後継者とするかが話し合われます。信長の後継者とは、すなわち天下取りに一番近い武将。清須会議に出席した人々の中で誰が天下に一番近いのか？これは清須城で天下取りをかけた4日間の会議の記録。



『尾張春風伝 上・下』
清水義範／著 幻冬舎
(913.6 シミ)

名古屋市出身の清水義範さんは名古屋に関する著作が数多くあります。『尾張春風伝』では江戸時代の尾張徳川家7代藩主、徳川宗春が主人公です。宗春は質素儉約を旨とした8代将軍徳川吉宗に逆らい、尾張で贅沢を推奨し、そのため公式の記録から抹消された人物です。藩主の20番目の男子として生まれ、跡継ぎには縁遠い彼がどのように尾張藩主になったのか…。登場人物の尾張弁にも注目です。

愛知県が舞台の現代小説



『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』
村上春樹／著 文藝春秋
(913.6 ムラ)

この物語の主人公、多崎つくるは友人四人と名古屋で高校時代を過ごします。しかし彼は仲の良かった四人から一方的に別れを告げられ…。



『三河恋唄』
西村京太郎／著 双葉社
(913.6 ニシ)

西尾市の吉良町は、忠臣蔵で有名な吉良上野介が治めていたところ。主人公の十津川警部は忠臣蔵から巻き起こる事件に関わっていきます。



『さよならドビュッシー』
中山七里／著 宝島社
(913.6 ナカ)
『このミステリーがすごい!』大賞受賞作

名古屋が舞台のミステリーです。火事によって多くのものを失った主人公は、自身のすべてをかけてピアニストを目指すのですが…。



『三州吉良殺人事件』
内田康夫／著 実業之日本社
(913.6 ウチ)

こちらは吉良町をはじめ豊川市や蒲郡市など、主人公の浅見光彦は母親と共に愛知県のあちこちを巡ります。



『林檎の白い花』
一里塚博／著 文芸社
(913.6 イチ)

岡崎市が舞台の物語です。岡崎の中央図書館のすぐそばの康生通りで殺人事件が起こります。しかし事件はそれだけで終わらず…。



『峰雲へ』
阿部夏丸／著 小学館
(913.6 アハ)

矢作川の川沿いで遊ぶ少年たちの青春の物語。川で遊んだ経験のある方なら懐かしいと思う風景ではないでしょうか。



愛知県が舞台のノンフィクション



『1リットルの涙』
木藤亜也／著 幻冬舎
(BU916 キト)

ノンフィクションで有名な作品です。日記を書いた亜也さんは豊橋市に住み、岡崎養護学校に通っていたようです。



『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』
坪田信貴／著 KADOKAWA
アスキー・メディアワークス (376.8カ)

事実は小説より奇なり、とは言われますが、絶対無理だと思われることを、名古屋の進学塾の生徒と講師が実現した物語です。



普段は本の中で地域をあまり意識したことは無いのですが、愛知県を舞台にした作品がこんなに沢山あったのに驚きます。皆さんも郷土に触れた作品を探してみたいはいかがでしょうか。

岡崎市立額田図書館

TEL 82-2953 開館時間 9:00~17:00
休館日 水曜 (祝日は開館します)